

基礎研 レポート

シングル高齢者の住宅と生活

～未婚女性の6割は1日60分以上歩くアクティブ層、未婚男性と離別・死別男女の1割弱は殆ど歩かない不活発層

生活研究部 准主任研究員 坊美生子
(03)3512-1821 mioko_bo@nli-research.co.jp

1—はじめに

前稿では、65歳以上で配偶者がいないシングルの高齢者が国内で増えている状況を説明し、その経済面について分析、整理した。本稿では、シングル高齢者は誰と、どのような住宅に住み、どのような暮らしを送っているのかという、生活面について探るため、前稿同様、公益財団法人「生命保険文化センター」（以下、文化センター）の「ライフマネジメントに関する高齢者の意識調査」（2020年）の高齢者調査⁽¹⁾のデータを用いて、住宅の状況や同居家族、親族との付き合い、社会参加といった側面について分析する。

2—シングル高齢者の住宅の状況

まずは、シングル高齢者の住宅の状況からみていきたい。住宅は、結婚や子の誕生、離婚、子の独立など、ライフイベントがきっかけで住み替えることが多いことから⁽²⁾、配偶関係による差が大きいと予測できる。

まず男性についてみると、配偶関係間で差が目立つのは「賃貸住宅（借家など）」の割合である。「未婚」では全体の4割を占め、「離別・死別」でも2割を超えるが、「配偶者あり」では1割にも満たない。当然だが、年収が減る老後も賃貸料がかかり続けるため、家計の負担が長く続くことになる。

代わりに、戸建てマイホームと言える選択肢「戸建て（自分または配偶者名義、住宅ローン支払い中）」と「戸建て（自分または配偶者名義、住宅居ローン支払いなし）」の合計をみると、「配偶者あり」では8割を超えるのに対し、「未婚」では約5割、「離別・死別」では約6割となっている。未婚でも半数がマイホームを持つのは意外に思えるが、家族がいない人が、わざわざ戸建てを自ら購入するとは考えにくい。親から相続して自身に名義変更したケースも多いのではないだろうか。

(1) 2020年10～11月、全国の60歳から90歳以上の男女個人を対象に、留置聴取法にて実施。回収サンプルは2,083。本稿の分析では、その中から65歳以上の回答結果を使用した（有効回答数は1,730）。

(2) 渡邊布味子（2021）「[2020年のマンション市場と今後の動向 コロナ禍で高まる需要、今マンションは買うべきなのか](#)」（基礎研レポート）

また、いずれの配偶関係でも、「戸建て（自分または配偶者名義、住宅居ローン支払いなし）」が最大になっているが、年金生活になっても、ローンの無い住宅を確保できているから安泰、とは限らない。老化して足腰が弱くなると、手すりをつけるなどのバリアフリー工事が必要になったり、家屋が老朽化すると修繕工事が必要になったりするからである。一般社団法人「住宅リフォーム推進協議会」の調査によると、住宅リフォームに実際にかかった費用（築10年以上）は、一戸建ての場合は約350万円、マンションの場合は約330万円に上るといふ⁽³⁾。要介護認定を受けていれば、バリアフリー工事には介護保険サービスを利用できる場合もあるが、いずれにせよ、イレギュラーな出費は発生する。

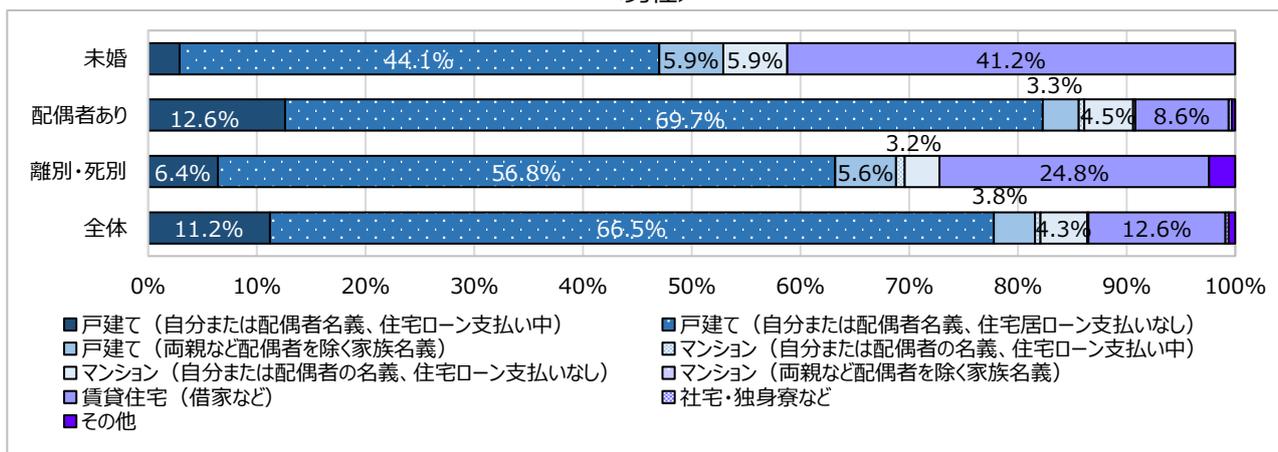
また、「戸建て（両親など配偶者を除く家族名義）」も「未婚」と「離別・死別」では1割弱いた。親名義の実家で、親と同居しているケースなどが考えられるが、名義人である親等が死亡すると、相続などが発生し、そのまま住み続けられるか、転居が必要になった場合、高齢になってから新たに賃貸住宅を確保できるか、という問題が発生する可能性がある。なお、数は少ないが、「その他」の内訳には、兄弟・姉妹と同居しているケースがある。

次に女性をみると、やはり配偶関係間で「賃貸住宅（借家など）」の差が目立つ。「未婚」では2割強、「離別・死別」では2割弱であるのに対し、「配偶者あり」では1割弱である。ただし、男性に比べると、いずれも割合は小さかった。

賃貸住宅の代わりに、シングル女性の方がシングル男性よりも割合が大きかったのが、「戸建て（両親など配偶者を除く家族名義）」である。「未婚」と「死別・離別」では、それぞれ2割弱に上った。上述したような相続等の問題は、シングル女性の方が、より多く発生しそうである。

戸建てマイホームと言える「戸建て（自分または配偶者名義、住宅ローン支払い中）」と「戸建て（自分または配偶者名義、住宅居ローン支払いなし）」の合計は、やはり「配偶者あり」（約8割）ほどではないが、「未婚」（約5割）と「離別・死別」（約6割）でも最多だった。こちらも、親から相続して名義変更したケースが多く含まれるのではないだろうか。

図表1 配偶関係別にみたシングル高齢者の住宅の状況
<男性>



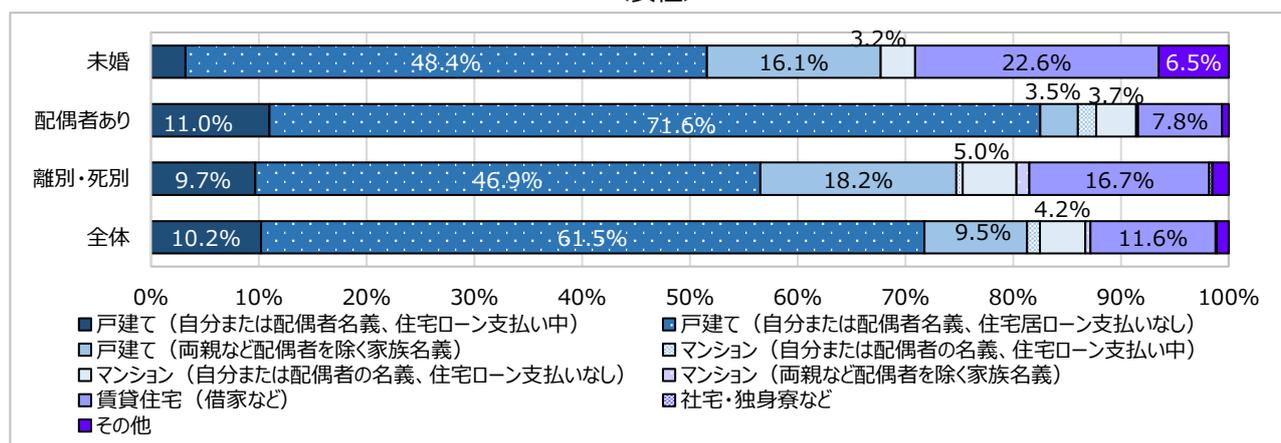
（備考1）Nは「未婚」=34、「配偶者あり」=627、「離別・死別」=125、「全体」=786。

（備考）5%未満の値は一部記載略。

（資料）公益財団法人「生命保険文化センター」の「ライフマネジメントに関する高齢者の意識調査」より作成。

(3) 一般社団法人「住宅リフォーム推進協議会」（2022）「住宅リフォームに関する消費者（検討者・実施者）実態調査結果報告書」。

<女性>



(備考1) Nは「未婚」=31、「配偶者あり」=538、「離別・死別」=341、「全体」=910。

(備考2) 同。

(資料) 同

3—シングル高齢者は誰と暮らしているのか

2でも少し触れたように、シングルでも親元で暮らしているというケースもある。同居している家族がいるかどうかによって、日々の暮らしは大きく変わってくるため、次に、配偶関係別に家族構成について分析した(図表2)。

まず男性からみていきたい。やはりシングルでは「独居」が大部分を占めた。「未婚」では8割弱、「離別・死別」では約6割である。独居ではないシングル男性は誰と暮らしているのかというと、「未婚」では兄弟姉妹というパターンが約2割いた。親との同居も1割弱あった。「離別・死別」の場合は子、あるいは子+孫、というケースがそれぞれ1~2割いる。

次に女性についてみると、まず、独居の割合は男性よりも小さい。「未婚」で7割弱、「離別・死別」で約5割となっており、それぞれ、同じ配偶関係の男性よりも、10ポイント以上低い。独居ではないシングル女性が誰と暮らしているのかというと、「未婚」の約2割は兄弟姉妹と同居、1割弱は親と同居していた。「離別・死別」の場合は子、あるいは子+孫、というケースがどちらも約2割いる。また、男性の「離別・死別」に比べると、子+孫で同居する三世帯がやや多いようだ。

このように、シングル高齢者の家族形態は、配偶関係によって差が大きく、当然ではあるが、「未婚」が独居の割合が一番大きい(「独居」は「未婚」で7~8割、「離別・死別」で5~6割)。独居について、同じ配偶関係同士の男女を比べると、男性の方が女性よりも割合が大きい。

ところで、シングルで独居の高齢者となると、孤立・孤独や閉じこもりのリスクが発生する。特にコロナ禍では、高齢者全体で、孤立・孤独不安を抱える人が発生し、閉じこもりが増えた⁽⁴⁾。特にシングルで独居の高齢者については、現在の健康状態への注意が必要であろう。

(4) 坊美生子(2022)「[コロナ禍における人間関係の疎遠化と孤立・孤独](#)」『第7回 新型コロナによる暮らしの変化に関する調査』より(基礎研レポート)、同(2022)「[コロナ禍で低下した高齢者の外出頻度](#)」『第8回 新型コロナによる暮らしの変化に関する調査』より(同)

図表 2 配偶関係別にみたシングル高齢者の家族構成

<男性>

	独居	二世帯			三世帯		その他	
		夫婦 (子なし)	本人(ま たは夫婦) と子	本人(または 夫婦)と親	本人(また は夫婦)と 子と孫	本人(また は夫婦)と 子と親	本人と 兄弟姉妹	その他
未婚	75.0%	0.0%	0.0%	6.3%	0.0%	0.0%	18.8%	0.0%
配偶者あり	2.3%	54.3%	25.6%	2.6%	10.0%	1.4%	0.2%	3.7%
離別・死別	59.2%	0.0%	21.6%	0.0%	12.0%	0.0%	2.4%	4.8%
全体	14.4%	43.4%	23.9%	2.3%	9.9%	1.2%	1.3%	3.7%

(備考) Nは「未婚」=32、「配偶者あり」=632、「離別・死別」=125、「全体」=789。

(資料) 公益財団法人「生命保険文化センター」の「ライフマネジメントに関する高齢者の意識調査」より作成。

<女性>

	独居	二世帯			三世帯		その他	
		夫婦 (子なし)	本人(ま たは夫婦) と子	本人(または 夫婦)と親	本人(また は夫婦)と 子と孫	本人(また は夫婦)と 子と親	本人と 兄弟姉妹	その他
未婚	67.7%	0.0%	0.0%	6.5%	0.0%	0.0%	22.6%	3.2%
配偶者あり	1.7%	58.9%	24.1%	1.7%	9.1%	0.7%	0.4%	3.5%
離別・死別	47.2%	0.0%	24.2%	1.2%	17.3%	0.6%	1.2%	8.4%
全体	20.8%	35.1%	23.3%	1.7%	11.8%	0.7%	1.4%	5.3%

(備考) Nは「未婚」=31、「配偶者あり」=541、「離別・死別」=339、「全体」=911。

(資料) 同

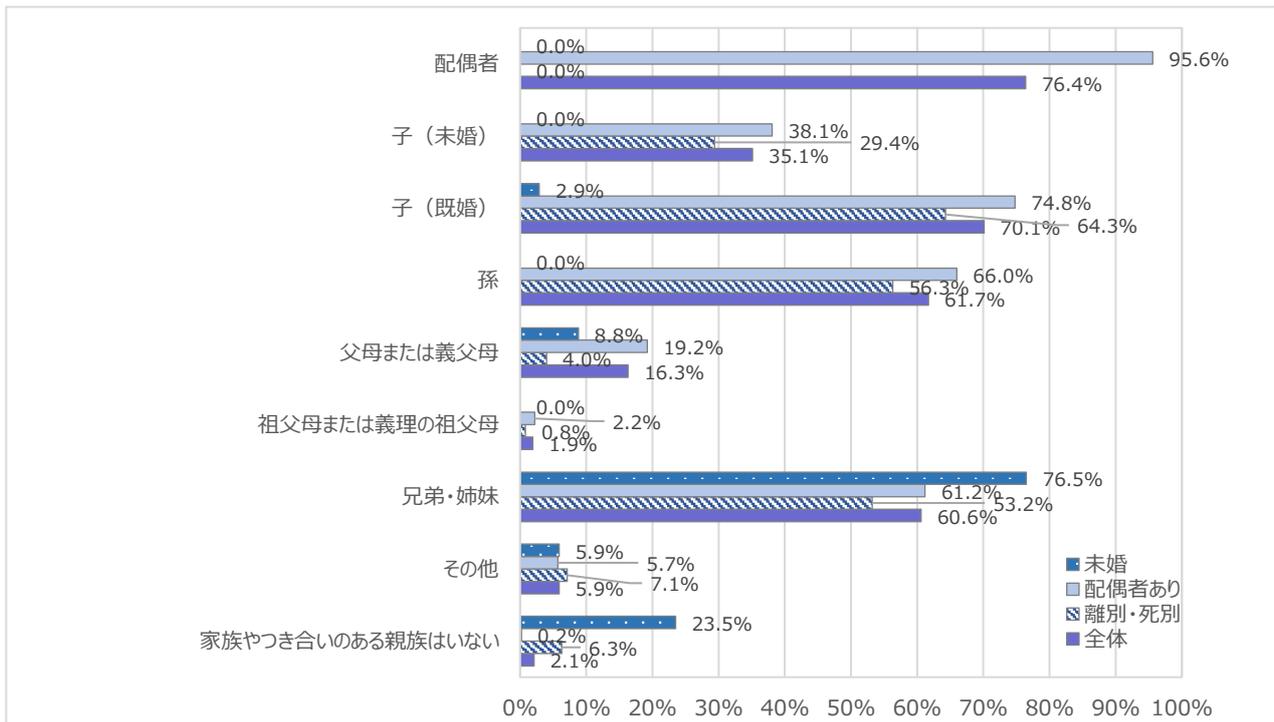
4—シングル高齢者の家族、つき合いのある親族

次に、シングル高齢者の交流の状況を探るために、同居家族と、同居でなくてもつき合いのある親族の範囲について分析した(図表3)。その結果、全体として「兄弟・姉妹」を挙げた人が多かった(図表3のそれぞれ下から三つ目)。配偶関係別に見ると、特に「未婚」でその割合が多かった。未婚男性では約8割、未婚女性では9割を超え、配偶者や子、孫がない中で、血縁関係のある兄弟・姉妹との結びつきが強い傾向があることが分かった。この傾向は、3でみた「未婚男女の各2割が兄弟姉妹と同居」という結果とも符合する。

また、注目すべきはグラフいちばん下の選択肢「家族やつき合いのある親族はいない」という、親族間の交流の無い層である。未婚男性のうち2割以上が選択していた。3でも述べたように、他者との関わりが少ないと、孤立・孤独、閉じこもりへのリスクが高まる。一方、女性では「家族やつき合いのある親族はいない」はいずれの配偶関係でもゼロか5%未満だった。女性の方が、男性に比べて親族との交流が盛んであることを示唆している。

図表3 配偶関係別にみたシングル高齢者の家族つき合いのある親族

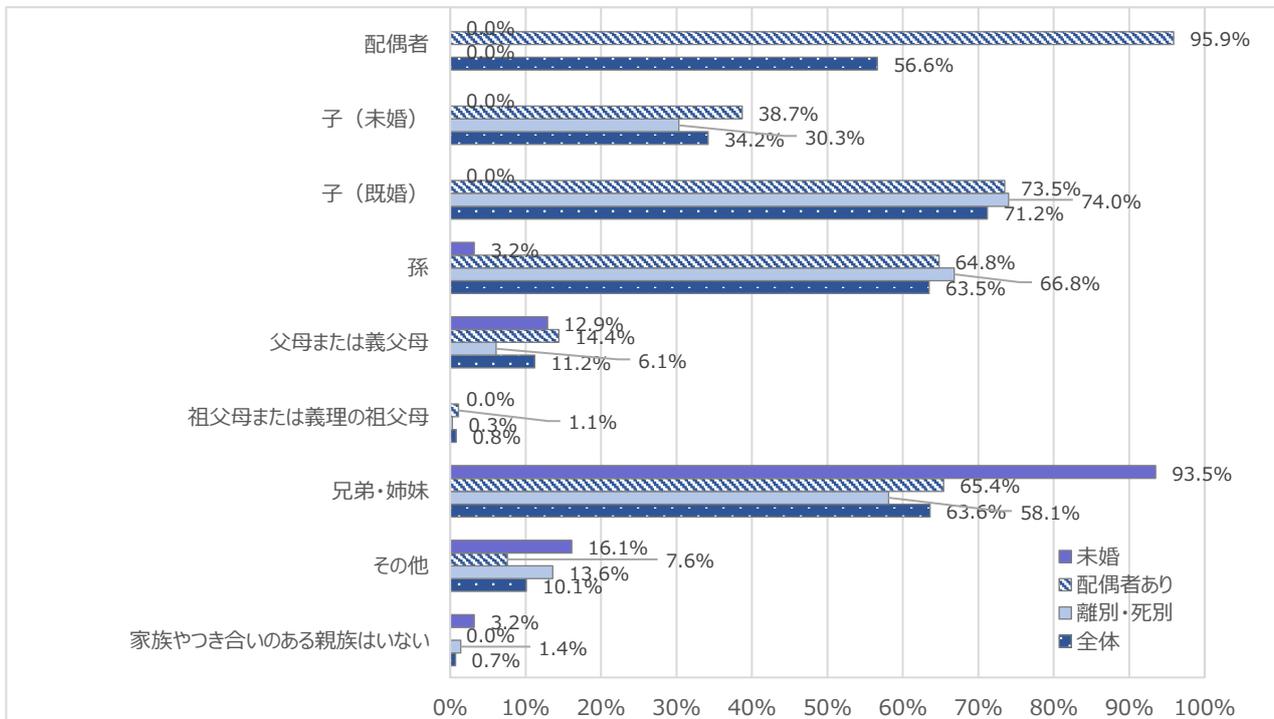
<男性>



(備考) Nは「未婚」=34、「配偶者あり」=636、「離別・死別」=126、「全体」=796。

(資料) 公益財団法人「生命保険文化センター」の「ライフマネジメントに関する高齢者の意識調査」より作成。

<女性>



(備考) Nは「未婚」=31、「配偶者あり」=543、「離別・死別」=346、「全体」=920。

(資料) 同

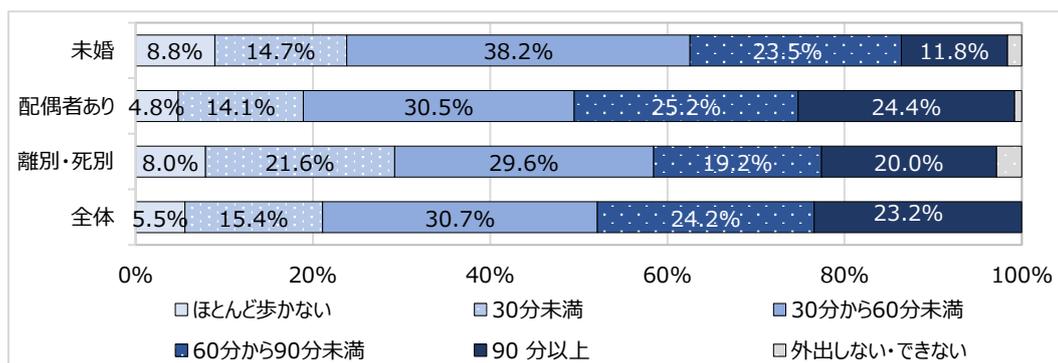
5—シングル高齢者の歩行習慣～社会参加の状況～

最後に、シングル高齢者の社会参加の程度を探るために、「歩行習慣」について、性・配偶関係別に分析した（図表4）。まず1日の歩行習慣が「60分から90分未満」と「90分以上」を合わせたアクティブ層について見ると、未婚女性が最も多い約6割と最も多い。次に多いのが「配偶者あり」の女性（約5割）、「配偶者あり」の男性（同）となっている。高齢未婚女性にアクティブ層が多い理由については、本稿の分析では明らかにできない。前稿でみた通り、就業率は、例えば60歳代後半の未婚女性は約2割で、他の性・配偶関係よりも特に高い訳でもなく、仕事の有無とは直接関係がなさそうである。この点は、今後の筆者の課題としたい。

次に、「ほとんど歩かない」という不活発層に注目したい。1日の中でほとんど歩かないなら、散歩などの運動習慣がないだけでなく、仕事や友人との交流など、社会参加の機会が殆ど無いと考えられる。

まず男性についてみると、「ほとんど歩かない」は「未婚」と「離別・死別」でそれぞれ1割弱存在した。女性の場合、「未婚」ではわずかだったが、「離別・死別」では1割弱となっていた。つまり、シングル男性と、未婚女性の1割近くは、ほとんど運動も社会参加もしていない不活発な生活をしていると見られる。

図表4 配偶関係別にみたシングル高齢者の歩行習慣
<男性>

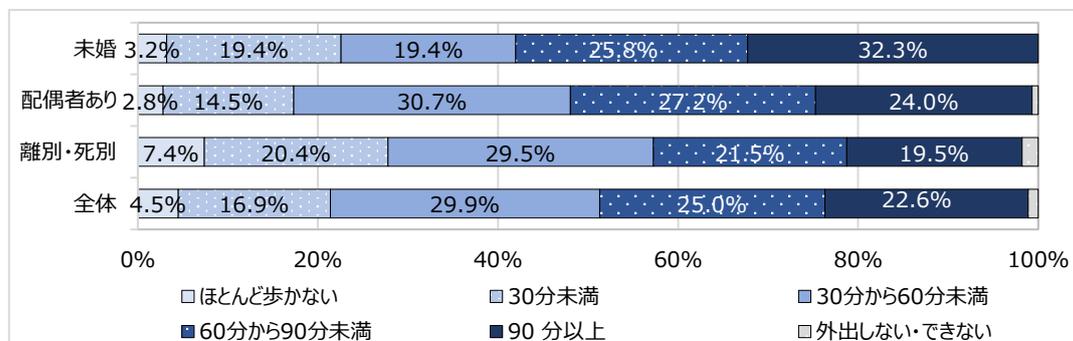


（備考1）Nは「未婚」=34、「配偶者あり」=622、「離別・死別」=125、「全体」=781。

（備考2）5%未満の値は一部記載略。

（資料）公益財団法人「生命保険文化センター」の「ライフマネジメントに関する高齢者の意識調査」より作成。

<女性>



（備考1）Nは「未婚」=31、「配偶者あり」=537、「離別・死別」=339、「全体」=907。

（備考2）同

（資料）同

6—終わりに

本稿でみてきたシングル高齢者の生活をまとめると、まず住宅については、賃貸住宅に住んでいる割合が、有配偶高齢者に比べて大きい。未婚男性だと約4割に上り、未婚女性では約2割だった。賃貸だと、収入が減った老後も賃貸料が発生し続けるため、長く、家計の重い負担になる可能性がある。

また、未婚と離別・死別の女性では、両親など家族名義の戸建てに住んでいる人も、それぞれ2割近くに上った。このような場合、現在は低費用で住宅を確保できていても、今後、名義人の死亡などライフイベントが発生すると、相続の問題等で、将来的に住み続けられるかどうかという問題に直面する可能性がある。シングルの住宅問題については、今後も動向を注視する必要があるだろう。

家族構成については、シングルは当然ながら独居が最多で、未婚だと7～8割、離別・死別だと5～6割だった。未婚では、男女とも約2割が兄弟姉妹と同居していたほか、1割弱は親と同居していた。同居家族とつき合いのある親族の範囲についても、未婚は兄弟・姉妹とつき合いがある割合が大きく、配偶者や子、孫といった家族がいない代わりに、血縁者である兄弟・姉妹との結びつきが深いことが分かった。今後、高齢者市場では、友人だけでなく、兄弟・姉妹との交流関係を考慮することが一つの鍵になるのかもしれない。

シングル高齢者の社会参加の程度を測る歩行習慣について見てみると、未婚女性では、1日60分以上というアクティブ層が約6割に達することが分かった。高齢未婚女性の行動範囲や支出行動については、今後の研究課題としたい。また、有配偶の女性や男性でも、約5割がアクティブ層である。有配偶の場合は、夫婦で外出しているケースも多いかもしれない。

一方、シングル高齢者の中で、他人との交流関係が薄く、不活発な層の存在も浮かび上がってきた。未婚男性では約2割が「家族やつき合いのある親族はいない」という状態だった。また、未婚と離別・死別の男性、離別・死別の女性では、歩行習慣についても「ほとんど歩かない」が1割弱存在した。つまり、未婚男性と、離別・死別の男女には、孤立・孤独や閉じこもりのリスクが相対的に高い可能性がある。筆者の既出レポートでも説明してきたように、高齢者の孤立・孤独や閉じこもりは、うつや認知機能低下、身体機能低下、死亡率上昇などにつながる恐れがあるため、注意が必要だ。介護予防の観点からも、特にシングルの高齢者は、意識的に地域に出て交流し、社会参加することが重要だろう。

次稿では、シングル高齢者たちの老後への意識と不安、備えについて分析する。